『楞伽経』における唯心

菅　英尚

一　序　『楞伽経』は中期大乗経典の重要な経典の一つであり、五法・三性・八識・二無我を始め、如来蔵・自内聖智といった様々な教説が説かれている。ここに採り上げる唯心もその一つである。五法・三性・八識・二無我が部分的に説かれているのに対して、如来蔵・自内聖智・唯心は経典全体を通して説かれている。かような様々な教説の根底にあるものは心である。この心の問題を、先には遍知〈parijñā〉・慧〈prajñā〉・識〈vijñāna〉・智〈jñāna〉といった〈√jñā〉の類語を中心にして考察した。[1] ここでは『華厳経』の三界唯心の文に始まる唯心説が、『楞伽経』ではいかように説かれているのかを考えてみたい。

二　心の分類　唯心の心がいかように説かれているかというに、『楞伽経』では種々な形で説かれているが、大略、次の三つにまとめることができる。

(1)　心によって業が積集され、智によって離散する。慧によって無相と自在とを証得する。心は境に縛され、智は覚想において生起する。無相と殊勝とにおいて、実に、慧が生起する。[2] これは一般的な、総括的な意味での心であり、智や慧と関連して用いられることが多い。

(2)　心はアーラヤ識であり、思量の性質を有するものが意である。諸々の境をとるものが、実に、識であるといわれる。[3] 心によって身体が執持され、実に、意は常に思量する。（意）識は（五）識と共に心の境を分析する。[4] これは心意識と並べて称されるもので、八識説の第八識であるアーラヤ識を意味している。ここでは心と意と識、更には識を意識と前五識に分けて、夫々の意味内容を述べているが、『唯識三十頌』の如き明確な定義を述べるまでには至っていない。

(3)　心が現わし出したものであることを遍知しないから、分別が二種に生起する。心が現わし出したものであることを遍知するから、分別が生起しない。[5]

人々の識は身体と受用と依処として顕現する。それ故に、その生起は波と俱なる如く現われる。[6]

アーラヤ識が自らの心が現わし出した身体と依処と受用という対象を一時に現わす如く……[7]

これは認識の構造を示すもので、心と識とアーラヤ識とが同じ意味に用いられている。外界のものは、自らの心・識・アーラヤ識が現わし出したものであるとか、或いは、この心・識・アーラヤ識が身体と受用と依処として現わし出したものである、と説き、唯の語はないが、唯心説の内容と同じものであり唯心の基本ともいえるものである。

三　三界唯心　かような心を内容としながら、『華厳経』の三界唯心の文を継承して、『楞伽経』も次の様に三界唯心を説く。

(華)　この三界に属するものは、これ心のみからなるものである。〈cittamātram idaṃ yad idaṃ traidhātukaṃ〉

(楞)　三界に属するものは、これ自らの心のみからなるものである。〈svacittamātram idaṃ traidhātukaṃ〉[8]

この他に、三界唯心の文に類似した用例があり、次の二種にまとめられる。[9]

(1)は、「三界に属するものは、心のみからなるものである。」といった用例で、『華厳経』の表現に近いものである。(2)は、「三界に属するものは、自らの心が現わし出したものみである。」といった用例で、自らの心が現わし出したもの、識らしむるもの、分別するもの、といった語句の加わった表現である。これは三界と心との関係、いいかえれば、主観と客観との媒介となる要素、認識の構造を明す要素の加わった表現であり、内容の展開がみられる。『華厳経』や『十地経論』に「作・所為」といった語句の付加された訳語がみられるが、『楞伽経』ではかような語句を必要とする表現の方が多い。又、〈cittamātra〉や〈prajñaptimātra〉の如き中観仏教に用いられたものと、〈vijñaptimātra〉や〈vikalpamātra〉といった瑜伽唯識の用語との双方が用いられ、中観から瑜伽唯識への教学の展開の一面も窺える。

(1)
- cittamātra
- svacittamātra
- cittamanomanovijñānamātra

(2)
- svacittadṛsyamātra
- prajñaptimātra
- vijñaptimātra
- vikalpamātra
- abhūtavikalpamātra

→ traidhātuka / tribhava / sarva / loka

四　唯心　『楞伽経』では、唯心を自心所現・唯自心所現・唯心といった術語で説明している。その用例としては、唯心よりも、自心所現、唯自心所現の用例の方が多い。

(1)自心所現〈svacittadṛsya〉の用例には、〈svacittadṛsya-

A-(B)-〉といった合成語が多い。[10] Aは、分別〈vikalpa〉・外界のものの無〈bāhyabhāvābhāva〉・幻〈māyā〉・迷乱〈bhrānti〉・対象・境界・行境〈viṣaya, artha, gati, gocara〉といった語句で、自らの心が現わし出した対象の状態や有様を説明するものである。更にBが付加される場合もあり、これはかような内容を覚証する、しないといった判断である。自心所現は、虚妄なる世界と、虚妄なる世界の様態、唯識の三性説でいう依他と遍計とを表わしている。これは虚妄なる三界の有様であり、『華厳経』の三界唯心の内容を敷衍したものといえる。三界は自らの心が現わし出したものであり、このような在り方を愚かな人々は覚証していないのであって、それを覚証すれば、分別は生起しないのである。これは依他・遍計・円成の名称を使っていないが、まさしく三性説と同じ内容である。

(2)唯自心所現〈svacittadṛsyamātra〉の用例は、自心所現と比較すると、Aが省かれ、唯〈mātra〉が付加されて、Bの判断を表わす語句に結びついている。[11] 用語例は少し異っているものの、その示す内容は同じもので、『唯識二十論』にいう「唯は境の無である」といった如き、強い意味はみられない。

自心の分別であることを遍知しないから分別が生起する。[12]

心の所現であることを遍知しないから、分別が二種に生起する。[5]

自心所現の外界の境を遍知するから、無始時来の戯論の麁重の習気の因を滅し、大慧よ、分別の所依を転ずることが解脱であり、滅ではない。[13]

バラモンよ、唯自心所現を覚証しないから、分別が生起するのであって、外界のものを了得するからではない。[14]

このように自心と心の所現と自心所現と唯自心所現とは同じ内容である。求那跋陀羅訳において、唯心を心量と訳したのは、この点を意趣したものも考えられる。

ここでは、唯よりもむしろ合成語として付加されたBに重点がある。具体的には、了得する〈adhigama〉・確証する。しない〈avadhārana, anavadhārina〉・了達する、しない〈avatāra, anavatāra〉・覚証する、しない〈avabodha, avabodhana, anavabodha〉・安立する〈avasthāna〉・遍知する、しない〈parijña, aparijña〉・善知しない〈akuśala〉といった語句である。[11]

自心所現、唯自心所現の内容を覚証すれば（Bのプラス面）、一切法の真実の在り方を見、如来蔵仏地へ趣入し、自内聖智、二無我を証得する、と悟りの世界に至ることを説いている。愚かな人々はこのことを覚証しない（Bのマイナス面）から、分別が生起し、有無の二見に堕する、と迷いの世界に陥ることを説いている。

この自心所現と唯自心所現とを覚証する方法が、菩薩の修行であり、①自心所現を修習すること、②生住滅の見を遠離すること、③外界のものの無を観察すること、④自内聖智の証得を楽求すること、の四つである。[16] これは世親の唯識の三部作と深い関わりをもっている。自心所現の修習を『三性論』に、生住滅の見の遠離を『三十頌』に、外界のものの無の観察を『二十論』に、夫々対応するとみなすことができ、世親と『楞伽経』の関係を示唆している。

(3)唯心　かくして自心所現、唯自心所現なることを覚証した内容は、悟りの世界であり、唯心といわれる。この唯心を、真如と空性と本際と涅槃と法界と意生身と、更には無心・不生・中道と同義語[16]であると説き、悟りの世界の様々な内容を、『楞伽経』に説かれる諸々の教説の根底にある心の問題に帰趨している。

このように見るとき、自心所現や唯自心所現の心と、唯心の心との内容には変化がみられる。それは、「知が所縁の境を認識しないとき……無分別の知を獲得する」[17]と入無相方便相を説く箇処において、知から無分別の知への質的な転換がみられるが、そこに説示される内容と同じものである。自心所現、唯自心所現の心から唯心の心への転換、知から無分別知への転換は、『楞伽経』の説き方の特徴ともいえる。

五　結び

上来、『楞伽経』の唯心について述べてきたが、その内容は次のようにまとめられる。

心の意味する内容は、一般的な意味での心を始めとして、八識説を立て、アーラヤ識とも同義に用いられ、更には認識の構造を示す箇処もみられ、唯心説の基本が見い出される。三界唯心においても、単なる主観と客観の問題から両者の関係や構造を一層明確にする用例が多くなり、また中観から唯識への教学の展開の途上にあるともいえる。唯心を自心所現、唯自心所現、唯心の語で説明し、その意味する内容は三性説と同じものである。自心所現と唯自心所現とは同じ内容で、虚妄なる世界とその様態（依他と遍計）とを示し、唯心は自心所現と唯自心所現とを覚証した悟りの世界（円成）を意味している。

1　『楞伽経』における〈vijña〉の類語（『龍谷大学仏教文化研究所紀要』第19集昭55・9）　2　南条文雄校訂『梵文入楞伽経』156頁、302頁　3　同278頁　4　同323頁　5　同186頁、311頁、343頁、345頁　6　同47頁　7　同64頁　8　同80頁　9　同80頁、168頁、186頁、208—209頁、212—213頁、218頁、270頁、274—275頁　10　同40頁、43頁、45頁、49頁、68頁、90頁、127頁、159頁、176頁、185頁、225頁、233—234頁　11　同9頁、40頁、43頁、51頁、72頁、90頁、104頁、112頁、115頁、123頁、140頁、150—151頁、170頁、176—177頁、184頁、208—209頁、213—214頁　12　同234頁　13　同233頁　14　同177頁　15　同79—80頁　16　同153—154頁、310—311頁、325—326頁　17　同169—170頁

（種智院大学講師）